

氏 名：山 村 美 枝

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 4 1 号

学位授与年月日：平成 2 2 年 9 月 3 0 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：小児看護学の教員が語る学生・子ども・母親とのあいだに
おける実習指導の困難さ

Pediatric Nursing Teachers' Narrative on Difficulty of
Instructing Students Concerning the Relation among
Students, Children and Mothers

論文審査委員：主査 筒 井 真優美

副査 鶴 田 恵 子

副査 濱 田 悦 子

副査 武 井 麻 子

副査 守 田 美奈子

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の概要】

小児看護学実習において、少子化により学生が子どもに接する機会が減少しているため、学生が子どもに関わることの難しさ、さらに、環境の変化により育児不安のある母親が増加しており、学生の家族へのかかわりについての難しさも指摘されている。しかし、実習でどのようなダイナミックスが生じているのか、学生・子ども・母親とのあいだで生じている教員の实習指導における困難さについては明らかにされていない。

【研究目的】

小児看護学の教員の語りから学生・子ども・母親とのあいだで生じている実習指導の困難さを明らかにする。

【研究方法】

＜参加者＞

中国・四国・九州地方の看護系大学の各大学ホームページで小児看護学実習の担当を明記している講師と助教・助手に依頼書を郵送し、返信があった教員に連絡した。参加者は研究に同意の得られた助教・助手の 8 名であった。

＜データ収集方法と分析方法＞

ナラティブ研究（やまだ，2007）によるインタビュー法を用いて、参加者あるいは申請者が所属する大学の一部屋でインタビューを実施した。インタビューは小児看護学実習の学生・子ども・親とのかかわりの中で難しかった場面や今でも気にかかっている場面などを語ってもらった。分析は実習指導場面で教員が感じる困難な状況について語っている部分に着目してデータを熟読し、

そこから抽出される主要な部分を見出し、データの関連性や意味を分析した。分析の全過程において研究指導教員からスーパービジョンを受けた。

＜倫理的配慮＞参加者には研究の趣旨について文書および口頭で説明し同意を得た。本人の意思により辞退が可能であること、個人が特定できないようにすること、学会等で発表することなどを伝えた。本研究計画書は日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会において承認された（2007年12月10日第2007-52）。

【結果】

小児看護学実習を担当している教員の実習指導の困難さに＜教員のジレンマ＞があり、困難さを通して＜繰り返される「これでよいのだろうか」という問い＞があった。

＜教員のジレンマ＞は、実習に母親が介在することで起きるジレンマと、実習の場に内在する問題から生じるジレンマという実習にからむ人間関係の中で生じていた。「母親が介在する難しさ」には「母親からの視線に不安を感じる教員」、「必死の母親に圧倒される学生と教員」、「学生の前に立ちはだかる母親」などのような母親の存在があり、そのことによって教員は学生、子どもおよび母親のあいだでジレンマを感じていた。「実習の場に内在する難しさ」は、「授業と現場の違いからくる理想と現実のギャップに納得のいかない学生を指導する難しさ」と「実習指導者の存在」があった。学生が授業で学んだことと病棟の現場とのギャップを感じていることに対して、また、学生が子どもにケアを実施する際に、教員と実習指導者の意見が異なった場合に、教員が実習指導することへの難しさを感じていた。

＜繰り返される「これでよいのだろうか」という問い＞について教員は、繰り返し同じ病棟で実習指導をするなか、一人で子どものことを抱え込み悩んでいる母親、泣いたり嫌がったりする子ども、そして学生に対して、「これでよいのだろうか」と自問自答を繰り返していた。それは教員が自分自身を振り返る体験でもあり、自分に対してこれでよいのだろうかと思い悩むことでもあった。

【考察】

＜小児看護学実習指導の困難さの背後にあるもの＞

教員は短期間実習の中で、子どもの安全を確保しつつ教員自ら急性期症状を持つ幼児へのケアを実施し、症状にあわせた子どもの機嫌や行動を予測したかわりを、学生に促すという小児看護学実習ならではの「子どもをケアすることの難しさ」があった。さらに、幼児の場合、親が代理決定していること及び、付き添っている母親と子どもが一体（nursing couple）の状態のため、子どもの病状に伴って母親の心身も揺れ動くことから、教員には「子どもと母親を同時にケアすることの難しさ」が生じていた。

＜教員の苦悩＞

教員は短期間で繰り返される実習指導を通して、自分が学生に実習指導ができていたのだろうかという自問・反省とともに、実習指導に対する不全感を抱く傾向があった。また、教員は苦痛を伴う子どもが目の前にいると「どうにかしなくては」という気持ちから、子どもの苦痛を少しでも和らげたいと思っていた。子どもの病状の変化に合わせて苦痛を感じている母親に対しても放っておくことができずにいた。教員は、子どもの苦痛、代理決定している母親の気持ち、子どもや母親の気持ちに揺れている学生の気持ちなどを、全て一人で抱え込みながら実習指導を行っ

ていた。

<語ることの意味>

教員は実習指導において「これでよいのだろうか」と迷ったり、ジレンマを感じることもあった。実習が次から次へと進んでいくので、振り返る機会がなかった。語ることは自分を振り返り、ジレンマや苦悩に気づくきっかけとなった。

<教育実践への示唆>

学生が感じる無力さは、子どもの苦痛を自分のことのように感じているからこそ生じているので、この気持ちを大事にすると共に、学生が子どものそばにいることも子どもへの大切なケアだと思えるようなサポートが望まれる。また、付き添いのある病棟では母子が一体の状態であるため、子どもの病状により一喜一憂する母親がいた。学生は子どもへのかかわりで精一杯であり母親の気持ちまで察することは難しいと思われるが、学生に母親の心身の揺れをどのように伝え、実習していくのが、今後の検討課題として残された。また、学生は実習において、授業で学んだ「子どもの最善の利益を守ること」と病棟の現場との違いに直面する。教員は学生の気持ちを尊重しつつも、なぜ授業で学んだことと異なることが病棟で起きているのかを、カンファレンスなどを通して学生と共に考える機会を作っていくことが望まれる。

論文審査の結果の要旨

本研究の参加者となった教員は親が付き添っている病棟で実習指導をしており、申請者はそこで生じている実習指導の困難さを描きだした。これまで小児看護学実習の場面では学生が子どもへかかわることの難しさや、子どもへかかわることに戸惑う学生を指導することの難しさについて研究されてきたが、学生・子ども・母親とのあいだにおける教員の実習指導については、課題があると指摘されつつも研究がされてこなかった。付き添いのある病棟で行われる小児看護学実習では、親が泊まり込みで24時間子どもの世話をしており、教員は親の存在を意識しながら実習指導をしていた。このような付き添いのある病棟における学生・子ども・母親とのあいだで生じている実習指導の困難さを明らかにした点に本研究のオリジナリティーがある。

教員は繰り返される短期間実習の中で、急性期症状のある幼児を受け持つ学生の実習指導についての事例を語っていた。急性期の子どもは急変する可能性もあり、子どもは予測できない行動をとるため、子どもの安全を確保しつつ教員自ら急性期症状を持つ幼児へのケアを学生とともに実施していた。症状に合わせた子どもの機嫌や行動を予測したかかわりを学生に促すという小児看護学実習ならではの子どもをケアすることの難しさがあった。幼児の場合は母親が子どもの生活や治療の代理決定をしていること、母親が24時間子どもの世話をしていること、さらに、子どもの病状に伴って母親の心身の状態が揺れ動くため、教員には子どもと母親を同時にケアする学生を指導することの難しさがあった。また、教員は苦痛のある子ども、子どもの病状の変化に合わせて揺れ動く母親、子どもや母親の気持ちに揺れている学生、それぞれの気持ちを全て一人で抱え込みながら実習指導をしていることも明らかになった。

さらに、学生は授業で学ぶことと病棟の現場との違いの中で実習をすることにジレンマを感じ、教員もまた、同じ思いの中で実習指導をしなければならないことへのジレンマを感じていた。このように小児看護学実習によって生じる学生や教員のジレンマは、これまで研究がほとんどなされておらず、教員の語りによって明らかになった。

小児看護学実習において学生が感じている子どものケアに対する無力感は、子どもをケアしているからこそ生じる感情なので、教員はその気持ちを大切にしよう学生を支援することが求められる。また、学生が授業で学んでいることと病棟の現場との違いを、教員がどのように学生に教え、実習指導するかが、今後の検討課題として挙げられた。

今回、教員はインタビューにおける語りを通して、自分の実習指導が「これでよいのだろうか」と戸惑う気持ち、悩みを抱えながら実習に臨んでいる自分に気づくきっかけを得ていた。今回の参加者となった教員はこれまで自らの実習指導について、他の人に語ることもなく、苦悩している自分に気づかないまま次々と実習指導に取り組んでいた。今回の研究を通して、苦悩しながら小児看護学の実習指導をしている教員の姿が見えてきた。今後、短期間で繰り返し行われる小児看護学実習の中で、戸惑い苦悩している教員をどのようにサポートしていけばよいのかという点については、教員が実習指導についての気持ちを語りあう場を設けることもひとつの示唆となるが、さらなる検討が必要である。

博士学位論文審査専門委員会では、審査の結果、本論文を学位規程第3条により、博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。